

第111期 貸借対照表・損益計算書  
2018年6月21日

東京都千代田区神田駿河台二丁目3番地  
日新火災海上保険株式会社  
取締役社長 村島雅人

2017年度 (2018年3月31日現在) 貸借対照表

(単位:百万円)

科 目	金 額	科 目	金 額
(資産の部)		(負債の部)	
現金及び預貯金	59,544	保険契約準備金	293,963
現金	4	支払準備金	48,873
預貯金	59,540	責任準備金	245,090
有価証券	285,985	その他の負債	15,696
国債	127,344	共同保険借	287
地方債	5,140	再保険借	4,768
社債	76,139	外国再保険借	45
株式	54,915	未払法人税等	1,322
外国証券	19,078	預り金	243
その他の証券	3,366	前受収益	7
貸付金	234	未払金	2,252
保険約款貸付	234	仮受金	6,754
有形固定資産	29,029	金融派生商品	1
土地	18,727	資産除去債務	11
建物	9,064	その他の負債	2
その他の有形固定資産	1,237	退職給付引当金	2,339
無形固定資産	91	賞与引当金	559
その他の無形固定資産	91	特別法上の準備金	1,292
その他の資産	26,104	価格変動準備金	1,292
未収保険料	58	負債の部 合計	313,851
代理店貸	9,892	(純資産の部)	
共同保険貸	222	資本金	20,389
再保険貸	5,425	資本剰余金	15,518
外国再保険貸	283	資本準備金	12,620
未収金	3,073	その他資本剰余金	2,898
未収収益	525	利益剰余金	26,522
預託金	875	利益準備金	7,769
地震保険預託金	987	その他利益剰余金	18,753
仮払金	4,729	(特別準備金)	( 8,840 )
金融派生商品	30	(不動産圧縮積立金)	( 1,745 )
前払年金費用	1,510	(繰越利益剰余金)	( 8,167 )
繰延税金資産	12,478	株主資本合計	62,430
貸倒引当金	△ 107	その他有価証券評価差額金	38,589
		評価・換算差額等合計	38,589
		純資産の部 合計	101,020
資産の部 合計	414,872	負債及び純資産の部 合計	414,872

[注記事項]

[貸借対照表]

1. 有価証券の評価基準および評価方法は次のとおりとしています。
  - (1) 満期保有目的の債券の評価は、移動平均法に基づく償却原価法（定額法）によっています。
  - (2) 子会社株式の評価は、移動平均法に基づく原価法によっています。
  - (3) その他有価証券のうち時価のあるものの評価は、期末日の市場価格等に基づく時価法によっています。

なお、評価差額は全部純資産直入法により処理し、また、売却原価の算定は移動平均法に基づいています。
  - (4) その他有価証券のうち時価を把握することが極めて困難と認められるものの評価は、移動平均法に基づく原価法によっています。
2. デリバティブ取引の評価は、時価法によっています。
3. 有形固定資産の減価償却は次のとおりとしています。
  - (1) リース資産以外の有形固定資産  
定額法により行っています。
  - (2) リース資産  
所有権移転外ファイナンス・リースに係る「有形固定資産」中のリース資産は、リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法により行っています。
4. 外貨建の資産および負債の本邦通貨への換算は外貨建取引等会計処理基準に基づき行っています。
5. 貸倒引当金は、債権の貸倒れによる損失に備えるため、資産の自己査定基準および償却・引当基準に基づき、次のとおり計上しています。

破産、特別清算、手形交換所における取引停止処分等、法的・形式的に経営破綻の事実が発生している債務者に対する債権および実質的に経営破綻に陥っている債務者に対する債権については、債権額から担保の処分可能見込額および保証による回収が可能と認められる額等を控除し、その残額を計上しています。

今後、経営破綻に陥る可能性が大きいと認められる債務者に対する債権については、債権額から担保の処分可能見込額および保証による回収が可能と認められる額を控除し、その残額のうち、債務者の支払能力を総合的に判断して必要と認められる額を計上しています。

上記以外の債権については、過去の一定期間における貸倒実績等から算出した貸倒実績率を債権額に乗じた額を計上しています。

また、すべての債権は資産の自己査定基準に基づき、各資産の主管部および審査所管部が資産査定を実施し、当該部署から独立した内部監査部が査定結果を監査しており、その査定結果に基づいて上記の計上を行っています。
6. 退職給付引当金は、従業員の退職給付に充てるため、当期末における退職給付債務および年金

資産の見込額に基づき、当期末に発生していると認められる額を計上しています。

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当期末までの期間に帰属させる方法については、給付算定式基準によっています。

過去勤務費用については、その発生時の従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（12年）による定額法により費用処理しています。

数理計算上の差異については、その発生時の従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（12年）による定額法により、発生の翌期から費用処理しています。

7. 賞与引当金は、従業員賞与に充てるため、支給見込額を基準に計上しています。
8. 価格変動準備金は、株式等の価格変動による損失に備えるため、保険業法第115条の規定に基づき計上しています。
9. 外貨建債券に係る将来の為替相場の変動リスクを軽減する目的で実施している為替予約取引については、時価ヘッジを適用しています。なお、ヘッジ手段とヘッジ対象の重要な条件が同一であり、ヘッジに高い有効性があるため、ヘッジ有効性の評価を省略しています。

10. 消費税等の会計処理は税抜方式によっています。ただし、損害調査費、営業費及び一般管理費等の費用は税込方式によっています。

なお、資産に係る控除対象外消費税等は仮払金に計上し、5年間で均等償却を行っています。

11. 金融商品の状況に関する事項および金融商品の時価等に関する事項については次のとおりです。

- (1) 金融商品の状況に関する事項

当社は、保険料として収受した資金等の運用を行っています。運用する資産は、長期火災保険や積立保険等の複数年にわたる保険契約に対応する負債対応資産とそれ以外に区分して管理しています。

負債対応資産については、将来、保険金や満期返戻金等を確実にお支払いするために、保険負債とのバランスを考え、資産・負債総合管理（ALM）を行っています。ALMにおいては、保険負債が抱える金利リスクを適切にコントロールしつつ、高格付債券を中心として一定の信用リスクをとる運用を行い、安定的な剰余の価値（運用資産価値－保険負債価値）の拡大を目指しています。

負債対応資産以外については、保険金のお支払いに備える流動性の維持も考慮しつつ、安定的な収益の獲得に向けて、投資対象の分散や資産運用の効率性の向上等に取り組んでいます。投資にあたっては、投資対象ごとのリスク・リターン特性のバランスを考慮し、債券、株式等への分散投資を行っています。また、保有する資産に係るリスクの軽減や、一定のリスクの範囲内での収益獲得を目的として、為替予約取引やデリバティブ取引も活用しています。

こうした取り組みによって、短期的な収益のブレを抑えながら運用収益を安定的に拡大させ、中長期的な純資産価値の拡大および財務基盤の健全性の維持につなげることを目指しています。

(2) 金融商品の時価等に関する事項

2018年3月31日における貸借対照表計上額、時価およびこれらの差額については、次のとおりです。

なお、時価を把握することが極めて困難と認められるものは、次表に含まれていません((注2)参照)。

(単位：百万円)

	貸借対照表 計上額	時価	差額
①現金及び預貯金	59,544	59,544	-
②有価証券			
満期保有目的の債券	1,211	1,435	224
その他有価証券	281,292	281,292	-
資産計	342,048	342,272	224
③デリバティブ取引(*)			
ヘッジ会計が適用されていないもの	-	-	-
ヘッジ会計が適用されているもの	29	29	-
デリバティブ取引計	29	29	-

(\*) その他資産およびその他負債に計上しているデリバティブ取引を一括して表示しています。

(注1) 金融商品の時価の算定方法

①現金及び預貯金

預金は短期で決済されるため、時価は帳簿価額と近似していると考えられることから、当該帳簿価額としています。

②有価証券

有価証券のうち、株式は取引所の価格によっており、債券は店頭取引による価格または取引金融機関から提示された価格等としています。また、投資信託については、公表されている基準価格等としています。

③デリバティブ取引

為替予約取引の時価の算定方法は先物為替相場によっています。

(注2) 時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品は、次のとおりです。

非上場株式および非上場株式中心に資産が構成されている組合出資金等(貸借対照表計上額3,481百万円)は、市場価格がなく、かつ、将来キャッシュ・フローを見積もることができないことから、時価を把握することが極めて困難と認められるため、時価開示の対象とはしていません。

なお、貸付金(貸借対照表計上額234百万円)は全額約款貸付です。約款貸付は保険契約に基づいた融資制度で、解約返戻金の範囲内で返済期限を定めずに実行

しており、将来キャッシュ・フローを見積もることができないことから、時価を把握することが極めて困難と認められるため、時価の開示対象とはしていません。

1 2. 貸付金のうち、破綻先債権額、延滞債権額、3 カ月以上延滞債権額および貸付条件緩和債権額はありませぬ。

(1) 破綻先債権とは、元本または利息の支払の遅延が相当期間継続していることその他の事由により元本または利息の取立てまたは弁済の見込みがないものとして未収利息を計上しなかつた貸付金（貸倒償却を行った部分を除く。以下「未収利息不計上貸付金」という。）のうち、法人税法施行令（昭和 40 年政令第 97 号）第 96 条第 1 項第 3 号イからホまで（貸倒引当金勘定への繰入限度額）に掲げる事由または同項第 4 号に規定する事由が生じている貸付金です。

(2) 延滞債権とは、未収利息不計上貸付金であつて、破綻先債権および債務者の経営再建または支援を図ることを目的として利息の支払を猶予した貸付金以外の貸付金です。

(3) 3 カ月以上延滞債権とは、元本または利息の支払が約定支払日の翌日から 3 月以上遅延している貸付金で、破綻先債権および延滞債権に該当しないものです。

(4) 貸付条件緩和債権とは、債務者の経営再建または支援を図ることを目的として、金利の減免、利息の支払猶予、元本の返済猶予、債権放棄その他の債務者に有利となる取決めを行った貸付金で、破綻先債権、延滞債権および 3 カ月以上延滞債権に該当しないものです。

1 3. 有形固定資産の減価償却累計額は 22,882 百万円、圧縮記帳額は 4,890 百万円です。

1 4. 関係会社に対する金銭債権総額は 1 百万円、金銭債務総額は 481 百万円です。

1 5. 繰延税金資産の総額は 29,074 百万円、繰延税金負債の総額は 15,080 百万円です。また、評価性引当額として繰延税金資産から控除した額は 1,515 百万円です。

繰延税金資産の発生の主な原因別の内訳は、責任準備金 21,933 百万円、退職給付引当金 2,649 百万円、有価証券評価損 1,326 百万円、ソフトウェア 1,181 百万円および支払備金 1,034 百万円です。

繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳は、その他有価証券に係る評価差額金 13,849 百万円です。

1 6. 関係会社株式の額は 43 百万円です。

1 7. 支払備金の内訳は次のとおりです。

支払備金（出再支払備金控除前、(ロ) に掲げる保険を除く）	44,093 百万円
<u>同上に係る出再支払備金</u>	<u>556 百万円</u>
差引 (イ)	43,536 百万円
<u>地震保険および自動車損害賠償責任保険に係る支払備金 (ロ)</u>	<u>5,336 百万円</u>
計 (イ+ロ)	48,873 百万円

1 8. 責任準備金の内訳は次のとおりです。

普通責任準備金（出再責任準備金控除前）	120,442 百万円
同上に係る出再責任準備金	2,905 百万円
差引（イ）	117,536 百万円
その他の責任準備金（ロ）	127,553 百万円
計（イ+ロ）	245,090 百万円

19. 1株当たりの純資産額は480円31銭です。

算定上の基礎である純資産額は101,020百万円、このうち普通株式に帰属しないものはありません。また、普通株式の当期末発行済株式数は210,320千株です。

20. 退職給付に関する事項は次のとおりです。

(1) 退職給付債務およびその内訳

イ. 退職給付債務	△21,057 百万円
ロ. 年金資産	10,785 百万円
ハ. 退職給付信託	6,805 百万円
ニ. 未積立退職給付債務（イ+ロ+ハ）	△3,466 百万円
ホ. 未認識数理計算上の差異	2,599 百万円
ヘ. 未認識過去勤務費用	38 百万円
ト. 貸借対照表計上額の純額（ニ+ホ+ヘ）	△829 百万円
チ. 前払年金費用	1,510 百万円
リ. 退職給付引当金（トーチ）	△2,339 百万円

(2) 退職給付債務等の計算基礎

退職給付見込額の期間配分方法	給付算定式基準
割引率	0.1%
長期期待運用収益率	1.70%
過去勤務費用の額の処理年数	12年
数理計算上の差異の処理年数	12年

(3) 退職一時金制度、確定給付企業年金制度および自社年金制度に基づく退職給付引当金の当期末残高（年金資産のうち、退職給付信託に係る退職給付引当金に相当する金額を含む。）の内訳は、次のとおりです。

	退職一時金 百万円	確定給付企業 年金 百万円	自社年金 百万円	合計 百万円
退職給付引当金 （年金資産控除前）	△3,486	1,326	△5,493	△7,653
退職給付信託の年金資産	1,167	183	5,472	6,823
退職給付引当金（純額）	△2,318	—	△20	△2,339
前払年金費用（純額）	—	1,510	—	1,510

21. 上記における子会社および関係会社の定義は、会社計算規則第2条に基づいています。

22. 重要な後発事象に関する事項は次のとおりです。

当期末日後に、翌期以降の財産または損益に重要な影響を及ぼす事象は生じていません。

23. スtock・オプションに関する事項は次のとおりです。

(1) スtock・オプションに係る当期における費用計上額および科目名

営業費及び一般管理費	82 百万円
------------	--------

(2) 当期に付与したStock・オプションの内容

当社の親会社である東京海上ホールディングス株式会社より、当社の取締役および執行役員に対して株式報酬型Stock・オプションが付与されており、当社は自社負担額のうち当期末までに発生した額を報酬費用として計上しています。

24. 金額は記載単位未満を切り捨てて表示しています。

2017年度

〔 2017年 4月 1日から  
2018年 3月 31日まで 〕

損益計算書

(単位：百万円)

科 目	金 額
経常収益	149,452
保険引受収益	145,945
正味収入保険料	141,820
収入積立保険料等運用益	1,866
積立保険料等運用益	1,790
責任準備金戻入額	458
その他保険引受収益	9
資産運用収益	3,418
利息及び配当金収入	4,526
有価証券売却益	464
有価証券償還益	201
為替差益	4
その他運用収益	10
積立保険料等運用益	△ 1,790
その他経常収益	87
経常費用	141,877
保険引受費用	117,552
正味支払保険金	75,185
損害手数料及び集金費	9,484
諸満期返戻金	24,041
契約者配当金額	6,705
支払準備金繰入額	36
支為その他保険引受費用	1,958
支為その他保険引受費用	1
資産運用費用	139
有価証券売却損	393
有価証券償還損	97
金融派生商品費用	21
その他運用費用	262
営業費及び一般管理費用	11
その他経常費用	23,841
その他経常費用	90
その他経常費用	90
経常利益	7,574
特別利益	16
固定資産処分益	16
特別損失	286
固定資産処分損失	8
減損損失	89
特別法上の準備金繰入額	188
価格変動準備金	( 188 )
税法引前当期純利益	7,303
法人税及び住民税	2,742
法人税等調整額	△ 784
法人税等合計	1,957
当期純利益	5,346



[注記事項]

[損益計算書]

1. 関係会社との取引による収益総額は133百万円、費用総額は3,155百万円です。

2. (1) 正味収入保険料の内訳は次のとおりです。

収入保険料	164,409百万円
<u>支払再保険料</u>	<u>22,588百万円</u>
差引	141,820百万円

(2) 正味支払保険金の内訳は次のとおりです。

支払保険金	91,744百万円
<u>回収再保険金</u>	<u>16,558百万円</u>
差引	75,185百万円

(3) 諸手数料及び集金費の内訳は次のとおりです。

支払諸手数料及び集金費	25,311百万円
<u>出再保険手数料</u>	<u>1,270百万円</u>
差引	24,041百万円

(4) 支払備金繰入額(△は支払備金戻入額)の内訳は次のとおりです。

支払備金繰入額(出再支払備金控除前、 (ロ)に掲げる保険を除く)	679百万円
<u>同上に係る出再支払備金繰入額</u>	<u>△221百万円</u>
差引(イ)	901百万円
地震保険および自動車損害賠償責任保険に 係る支払備金繰入額(ロ)	<u>△290百万円</u>
計(イ+ロ)	610百万円

(5) 責任準備金繰入額(△は責任準備金戻入額)の内訳は次のとおりです。

普通責任準備金繰入額(出再責任準備金控除前)	△1,825百万円
<u>同上に係る出再責任準備金繰入額</u>	<u>△669百万円</u>
差引(イ)	△1,155百万円
<u>その他の責任準備金繰入額(ロ)</u>	<u>697百万円</u>
計(イ+ロ)	△458百万円

(6) 利息及び配当金収入の内訳は次のとおりです。

預貯金利息	2 百万円
有価証券利息・配当金	4,253 百万円
貸付金利息	11 百万円
不動産賃貸料	256 百万円
<u>その他利息・配当金</u>	<u>3 百万円</u>
計	4,526 百万円

3. 金融派生商品費用中の評価損益は1,012百万円の損です。

4. 1株当たりの当期純利益金額は25円42銭です。算定上の基礎である当期純利益は5,346百万円、このうち普通株式に帰属しないものはありません。また、普通株式の期中平均株式数は210,320千株です。

潜在株式調整後1株当たりの当期純利益金額については、潜在株式が存在しないため記載していません。

5. 損害調査費、営業費及び一般管理費に計上した退職給付費用は1,025百万円であり、その内訳は次のとおりです。

勤務費用	843 百万円
利息費用	21 百万円
期待運用収益	△181 百万円
数理計算上の差異の費用処理額	350 百万円
<u>過去勤務費用の費用処理額</u>	<u>△8 百万円</u>
計	1,025 百万円

6. 当期における法定実効税率は28.2%、税効果会計適用後の法人税等の負担率は26.8%であり、この差異の主要な内訳は、評価性引当額△2.5%、住民税均等割1.4%、受取配当等の益金不算入額△1.4%、交際費等の損金不算入額0.6%です。

7. 当期において、以下の資産について減損損失を計上しています。

(単位:百万円)

用途	種類	場所等	減損損失		
			土地	建物	合計
売却予定不動産および解体予定不動産	土地および建物	山梨県甲府市に保有するビル	63	26	89

保険事業等の用に供している不動産については、保険事業等全体で1つの資産グループとし、賃貸用不動産等、遊休不動産等および売却予定不動産等については主たる用途に基づき個別の物件毎にグルーピングしています。

売却予定不動産および解体予定不動産において、建物の取り壊しが決定したことに伴い帳簿価額を回収可能価額まで減額し、当該減少額を減損損失として特別損失に計上しています。

なお、当該資産の回収可能価額は正味売却価額としています。正味売却価額は不動産鑑定士による鑑定評価額等から処分費用見込額を減じた額です。

8. 金額は記載単位未満を切り捨てて表示しています。